

統合失調症患者の
薬物療法に関する処方実態調査
(2017年)
～ 全国107施設の調査から ～

○社会医療法人北斗会 さわ病院 天正 雅美
精神科臨床薬学(PCP)研究会
黒沢雅広、宇野準二、加藤剛、梅田賢太、
高田憲一、三輪 高市、野田幸裕、吉尾隆

倫理的配慮

本調査や解析では個人情報を慎重に取り扱い、十分な倫理的配慮を行った。

日本精神神経学会

利益相反(COI)開示

筆頭発表者名: 天正 雅美

演題発表に関連し開示すべきCOIはない。

目的

- 精神科臨床薬学研究会(以下、PCP研究会)会員の所属する施設に入院中の統合失調症患者について処方実態調査を行い、薬物療法の実態を把握することを目的とする。
- 本報告では、2017年の調査結果と病棟種別の処方状況について報告する。

方法

- 対象：PCP研究会会員の所属する全国107施設 に入
院中の統合失調症患者15,284人
- 調査日：2017年10月31日
- 調査項目：年齢、性別、病棟種別、服薬回数、服薬指
導実施の有無、抗精神病薬、抗パーキンソン薬、抗不
安薬・睡眠薬、気分安定薬の投与剤数および投与量
- 病棟種別：急性期、救急、精神一般、療養、身体合併、
その他

方法

● 統計解析

比率の差の検定には χ^2 検定、

2群間の平均値の差の検定にはStudent-t検定、

3群間の平均値の差の検定には分散分析を行った後でTukey法を用いて解析した。いずれも有意水準は5%とした。

調査対象

	2015年	2016年	2017年
施設数	131	127	107
患者数 (男/女)	17,874 (9,144/8,730)	17,371 (8,865/8,506)	15,284 (7,642/7,642)
平均年齢 (min-max)	58.4 (7-100)	58.6 (13-103)	58.8 (11-102)
平均服用回数 (min-max)	3.39 (1-10)	3.30 (0-10)	3.30 (0-10)
服薬指導実施率 (実施/未実施)	24.7 % (3,683/11,234)	25.3 % (3,525/13,913)	25.8% (3218/9240)

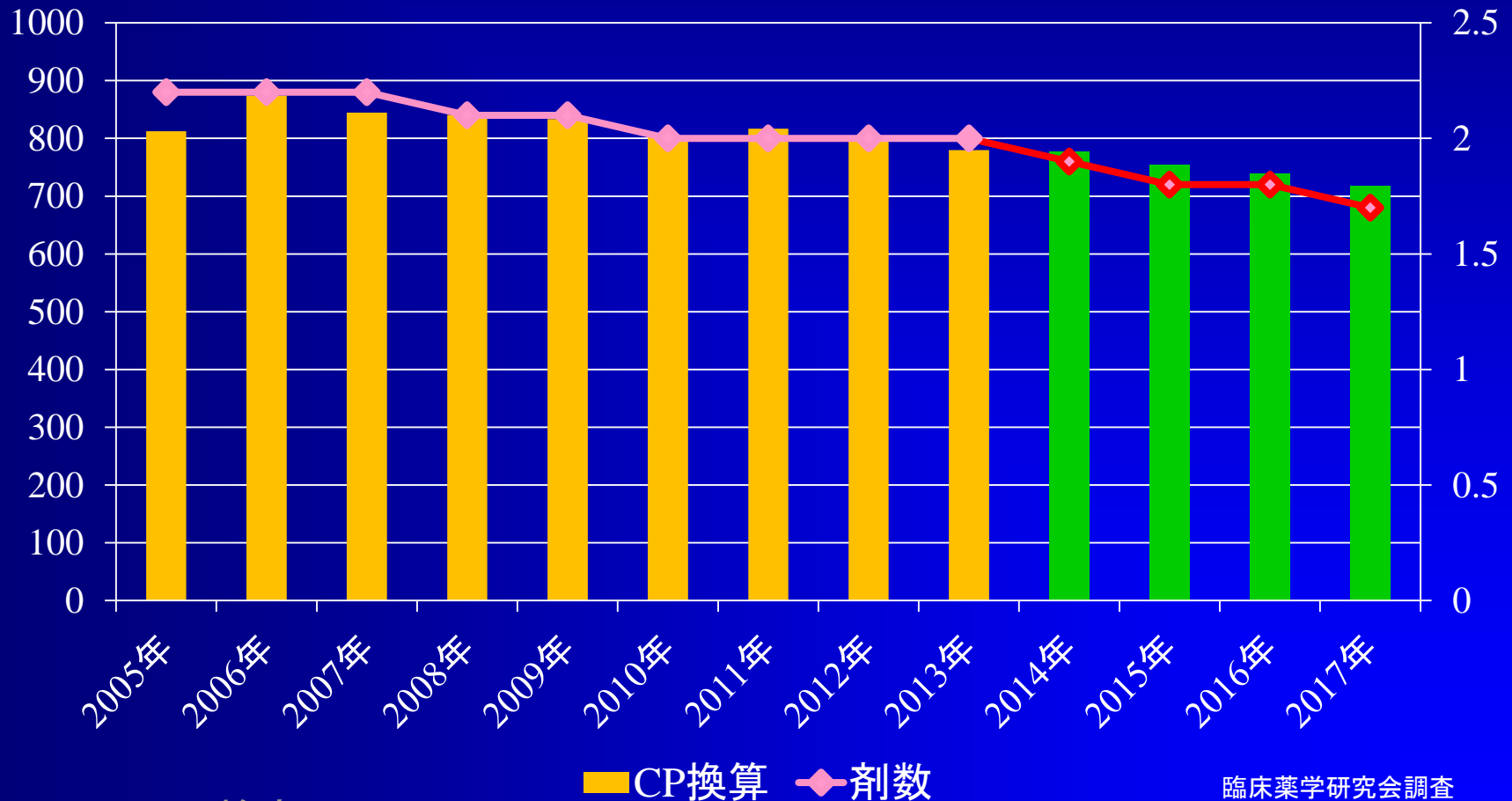
向精神薬処方状況の推移①

	2015年	2016年	2017年	* ANOVA P<0.05	Post-hoc Tukey P<0.05	
抗精神病薬	剤数	1.8	1.8	1.7	*	2016-2017 2015-2017
	CP換算 (mg/日)	754.5	738.1	723.7	*	2016-2017 2015-2017
抗パーキンソン薬	剤数	0.5	0.5	0.4	*	2016-2017 2015-2017
	BP換算 (mg/日)	1.3	1.2	1.1	*	2016-2017 2015-2017

向精神薬処方状況の推移②

		2015年	2016年	2017年	* ANOVA P<0.05	Post-hoc Tukey P<0.05
抗不安薬・睡眠薬	剤数	1.1	1.1	1.1		
	DAP換算 (mg/日)	11.1	10.0	9.4	*	2016-2017 2015-2017
気分安定薬	Li (mg/日)	566.1	563.9	554.4	*	2016-2017 2015-2017
	CBZ (mg/日)	487.7	452.0	442.5	*	2016-2017 2015-2017
	VPA (mg/日)	661.2	650.3	644.3		
	LTG (mg/日)	168.2	161.4	158.1		

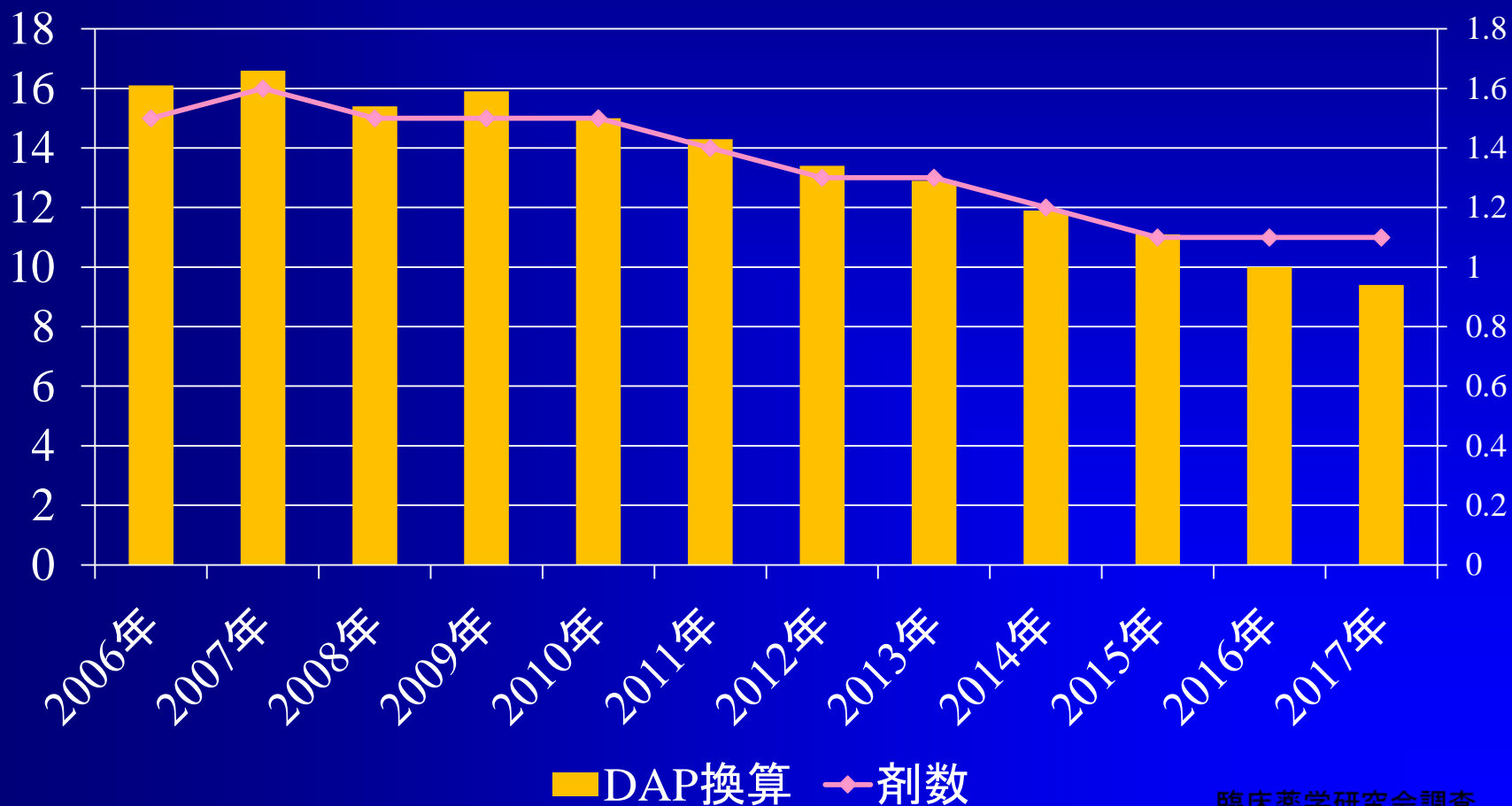
抗精神病薬の投与量と剤数



Tukey検定 $P < 0.05$ *

臨床薬学研究会調査

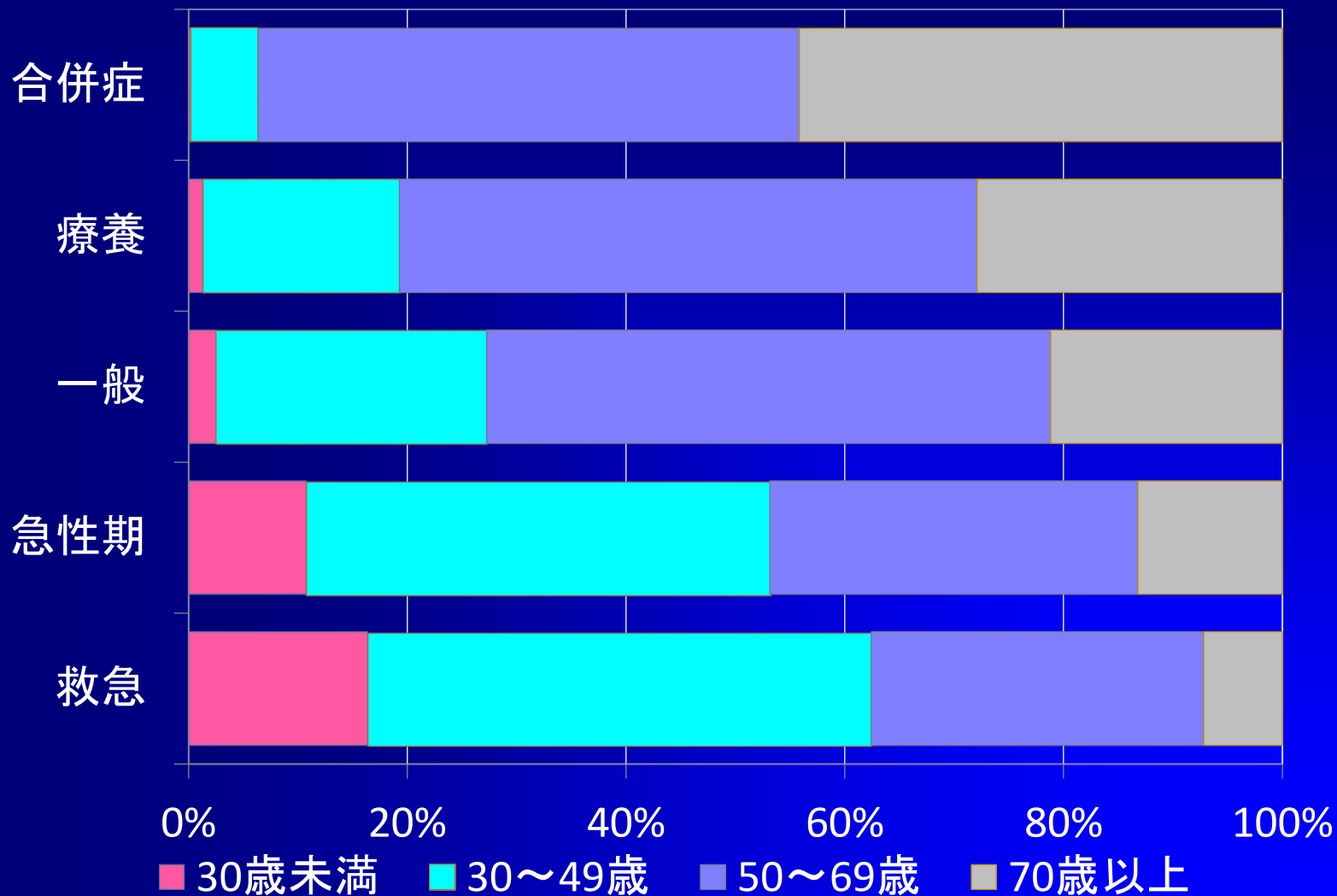
睡眠薬・抗不安薬の 投与量と剤数



病棟種別 調査対象の内訳

	救急	急性期	一般	療養	合併症
患者数 (男/女)	947 (487/ 460)	621 (285/ 336)	5548 (2818/ 2730)	5362 (2680/ 2682)	376 (179/ 197)
平均年齢 (min-max)	45.7 (13-92)	49.6 (15-92)	58.2 (13-96)	61.6 (15-96)	67.7 (27-102)
平均 服用回数 (min-max)	2.84 (0-7)	3.18 (0-10)	3.33 (0-10)	3.40 (0-8)	3.24 (0-7)
服薬指導 実施率	20.9 %	13.2%	39.9%	7.0%	12.5%

病棟種別 年齢構成



抗精神病薬処方上位

	救急	急性期	一般	療養	身体合併
1位	リスペリドン	リスペリドン	オランザピン	リスペリドン	リスペリドン
2位	オランザピン	オランザピン	リスペリドン	オランザピン	オランザピン
3位	アリピプラゾール	アリピプラゾール	クエチアピン	レボメプロマジン	クエチアピン
4位	パリペリドン	クエチアピン	アリピプラゾール	ハロペリドール	レボメプロマジン
5位	クエチアピン	レボメプロマジン	レボメプロマジン	クエチアピン	アリピプラゾール

病棟種別 処方状況

抗精神病薬

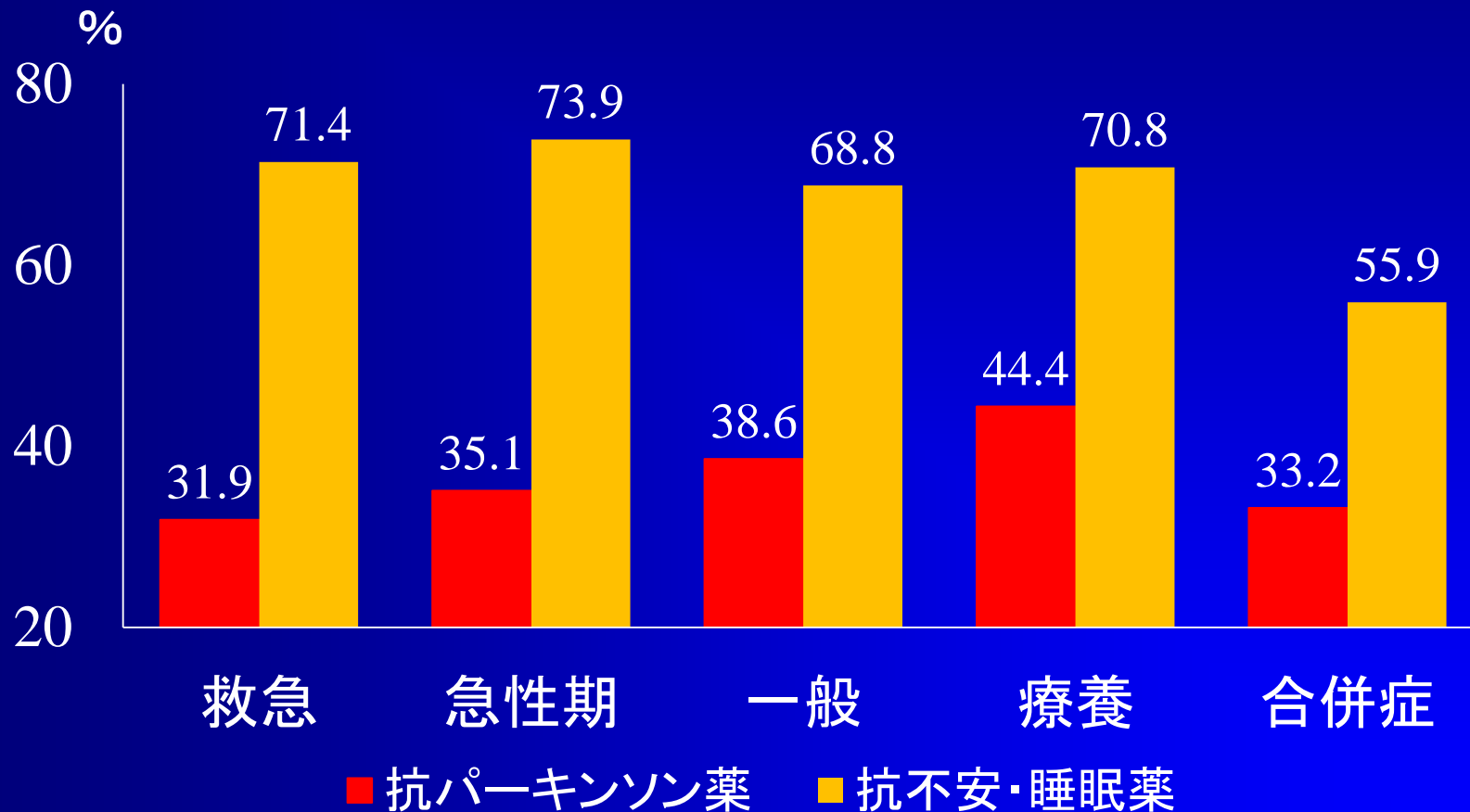
抗パーキンソン薬

抗不安薬・睡眠薬

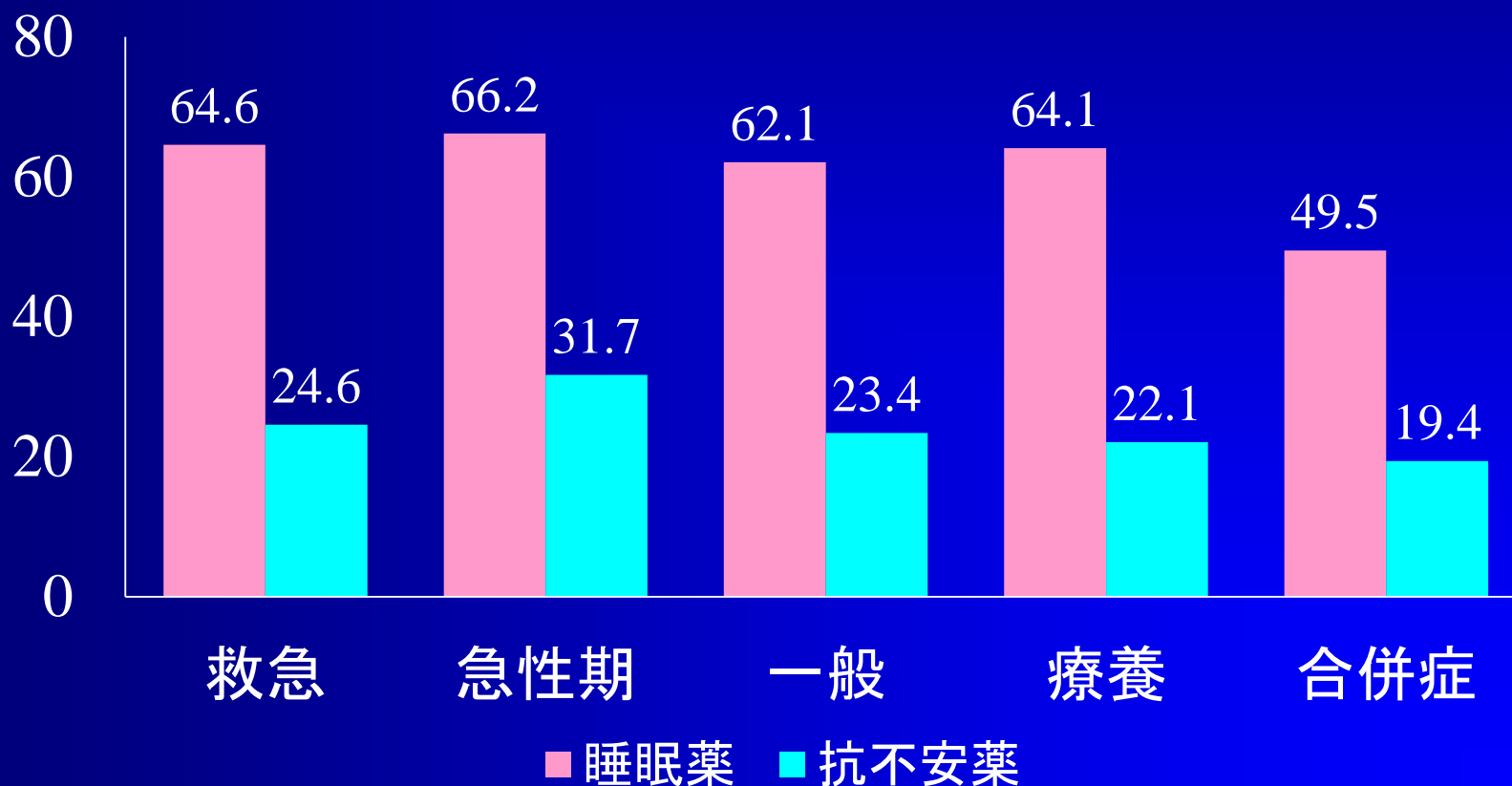
	剤数	投与量 (mg)	単剤率 (%)	剤数	投与量 (mg)	剤数	投与量 (mg)
救急	1.5	719.6	55.6	0.3	0.9	1.1	9.5
急性期	1.7	707.7	43.6	0.4	1.0	1.3	11.7
一般	1.7	785.3	41.7	0.4	1.1	1.1	9.4
療養	1.8	712.4	40.5	0.5	1.3	1.1	10.1
合併症	1.4	509.5	54.3	0.4	0.9	0.9	7.2

病棟別 併用薬の処方状況

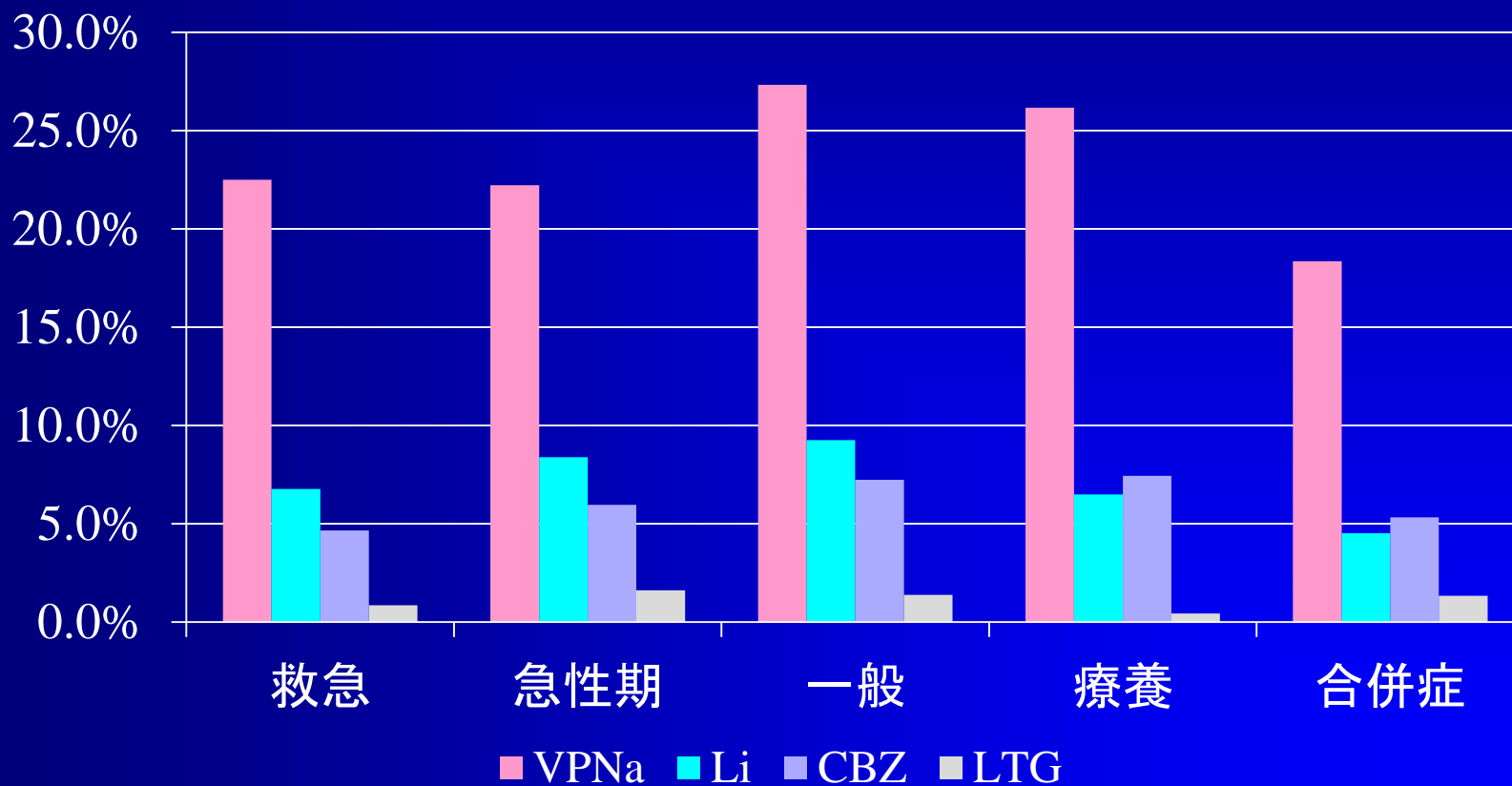
<併用率>



病棟別 睡眠薬・抗不安薬併用率



病棟別 気分安定薬併用率



考察

- 抗精神病薬、抗パーキンソン薬については、投与剤数、投与量とも年々減少しており、減量化にむけたチームでの取り組みが進んでいることが示唆された。
- また、2014年より抗精神病薬の平均投与量・投与剤数が有意に減少しているのには、診療報酬において、外来患者の処方に対する投与剤数が減算対象として導入されたことが入院患者の処方にも影響を与えているのではないかと考えられる。

考察

- 病棟別処方状況において、平均年齢の高い療養病棟では他の病棟に比べて単剤化率が低く、認知機能に影響を与えると考えられる抗パーキンソン病薬・抗不安薬・睡眠薬の投与量が多かった。
- また、使用されている薬剤についても上位に第一世代抗精神病薬が認められた。そして服薬指導実施率が他の病棟と比較して低かった。
- これらの結果から、今後の薬剤師が療養病棟入院患者に積極的に関わることにより、処方の適正化と患者QOLの向上に寄与できると考える。